

# 平成の青年団と地域祭礼 —高知県における変遷と実践活動—

楠瀬 慶太\*

(受領日：2020年5月7日)

高知工科大学 地域連携機構  
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

\* E-mail: kusukei31@yahoo.co.jp

要約：本稿では、平成期の高知県における青年団の実態を、地元新聞記事の分析と関係者への聞き取り調査から検証した。まず、「再生期」（平成元年～7年）、「衰退期」（平成8年～22年）、「復興期」（平成23年～31年）という青年団活動の画期を設定した。イベント的な地域祭礼の担い手として役割が固定化し、若者の減少によって衰退していった青年団だが、復興期には夜学や婚活、防災、防犯、祭礼など従来の青年団の役割をリニューアルさせた活動が行われた。大学生が新しい担い手として加わり、世代をこえて地域とつながる活動が展開された。背景には、昭和期に地域づくりを担ったリーダーの高齢化や人口流出による地域力の衰退など課題先進県と言われる高知県の現状があり、課題を乗り越えようとする若者達の危機感が新しい活動につながった。平成の時代には、青年団以外の青年グループが数多く登場したが、地域との長いつながりにおいて青年団は一定の役割を果たしていた。

## 1. はじめに

青年団とはかつて全国の集落にあった20代～30代の若者を中心とした団体である。戦後は地域のほとんどの若者が所属する組織だったが、1960年代の高度経済成長期以降団員を減らし、平成期に入るとさらに大きく組織が減退していった。

平成24（2012）年夏、人気アイドルグループ「関ジャニ∞」の安田章大が主演を務めたテレビドラマ「ドラゴン青年団」が深夜枠で放送された。架空の地方都市で活動する「光山町青年団」の団員が光の戦士となり、突如現れたドラゴンを倒すというファンタジー作品だったが、数少ない若者で活動する姿や町おこしの取り組みなど平成の青年団の実態が描かれていた。ちょうど平成24年に高知県四万十市の若者たちと「中村連合青年団」（図1）を20年ぶりに復活註1させ活動を始めた筆者らは、全国放送で地域の青年団がドラマに取り上げられたことに勇気もらった。

若者の地域外への流出によって青年団組織がほぼ



図1. 復活した中村連合青年団

壊滅状態にあった高知県西部では、平成20年代前半に「中村連合青年団」を始めとして「黒潮若手の会」など多くの青年グループが結成され、20代・30代の若者による地域おこし活動が盛んに行われた。各団体が取り組んだのがフェスなどの地域イベント開催である。若者が中心となり、老若男女が集まる様々な催しで地域を活気づけ、運営を通して成長し

ていく様は、かつて夏祭りや秋祭りなどの伝統的な地域祭礼を担った青年団をほうふつとさせた。さらに平成20年代後半になると、高知県の青年団は大学生という新たなメンバーを加えて、東北の被災地支援やよさこい祭りへの参加など新たな方向性を見いだしていく。

本稿は、実践者（青年団員）または取材者（高知新聞記者）、または歴史学・民俗学の研究者として高知県における平成期の青年団を見守ってきた筆者が、その変遷と実践活動をまとめ、新元号・令和の時代において青年団が果たす役割を提案するものである。ここでは、伝統的な祭礼やイベントなどの催しを含む広義の「地域祭礼」を切り口に平成期の青年団活動を実証的に分析し、過疎高齢化が進む全国の地域社会で衰退していった青年団が、なぜ過疎先進県の高知県で新たな動きを見せているのかを考えてみたい。

## 2. 研究史と課題

### 2.1 昭和・平成期の青年団研究

青年団の成立過程は地域によっても異なるが、主に古くから村落にあった年齢階梯集団「若者組」や「青年組」が大正時代以降に再編されていったものである。そのため、若者組に指摘される、自警や祭礼の担い手などの労働組織としての役割、若者同士が村の成員としてふさわしい人材を育てる教育機関としての役割、若者同士の交流を通じた婚姻組織としての役割を、青年団も踏襲していた<sup>1)</sup>。

戦後の青年団研究として、地域青年団の成立過程や展開を研究した歴史学者の北河賢三氏や多仁照廣氏、高木重治氏らの研究<sup>2)</sup>があり、地域の動向は日本青年団協議会（日青協）や各県の青年団活動の記録誌などに詳しくまとめられている。民俗学の分野では、徳島県牟岐町西浦地区の青年団を事例に戦後の青年団の解体過程を民俗学的に考察した研究<sup>3)</sup>や群馬県川場村春駒を事例に民俗芸能の復興と戦後青年団との関わりを分析した研究<sup>4)</sup>などがある。平成の青年団を対象とする本稿では、それにつながる1970年代、1980年代の青年団の活動を同時代的に検討してきた社会教育分野の研究を青年団の機能や役割に着目して整理する<sup>註2)</sup>。

青年団の団員減少は1960年代に大きく進んだが、1970年代になると減少が下げ止まり傾向にあり、地域で新たな活動が行われた。青年団運動の第二高揚期とも呼ばれたこうした状況を地域の活動実態調査に即して分析したのが那須野隆一氏や笹川孝一氏、元木洋氏である。那須野氏は、活動を活性化さ

せた青年団が喫茶店や個人宅、公民館などに拠点を作っていることに着目する。これを江戸時代や近代の地域にあった若衆宿に類する「たまり場」として概念化し、そこでさまざまな学習活動を行い、自身や家族の生活史を発表し合う「生い立ち学習」の重要性を提起している<sup>5)</sup>。一方、笹川氏は高揚期の背景の一つとして1970年代に行政が展開した「ふるさと運動」や「ボランティア運動」の影響があったと指摘しながら、青年団が戦後進めてきた「地域づくり」活動を正面に掲げ、自発的に活動していかなければならないと提起している<sup>6)</sup>。また、村の青年がふるさとの自然や文化を見直し、出稼ぎや離村をくい止め村に活気を取り戻すことを目的に秋田県連合青年団が1973年から展開した活動を分析した元木氏は、この活動が秋田県のふるさと運動への補助金や政策と連動しており、青年団の地域活動や社会参加が青年の自主性でなく行政の推進によって行われるようになっていくことを指摘している<sup>7)</sup>。

青年団研究所の調査研究委員も務めていた那須野氏、笹川氏の問題提起は、住民らへの聞き取り・アンケートなどによる「地域診断」、それに基づく「地域計画づくり」などの「地域づくり運動」として理論化され、青年団活性化の具体策としてその後日青協から書籍化され全国に普及していく<sup>8)</sup>。団員や組織の減少にさらに拍車がかかった1980年代には、組織再編や団員拡大、活性化策の実践例が紹介され、模索が続いている<sup>9)</sup>。平成の時代（1990・2000年代）には、『月刊社会教育』『社会教育』の雑誌で定期的に全国の青年団の活動報告が掲載されているが、組織の弱体化が深刻化しており、青年団の研究自体が少なくなっているのが現状である。1980年代の愛媛県内における青年団のスポーツ活動の分析研究<sup>10)</sup>や公民館や青年会館と青年団に関する一連の研究<sup>11)</sup>、青年団活動と若者の人間形成を聞き取り調査から分析した研究<sup>12)</sup>などがあげられる。

そんな中、比較的青年団の活動が盛んな鹿児島県の1990・2000年代の青年組織を詳細に分析した池水聖子氏らの研究は注目すべきである<sup>13)</sup>。2014年の調査が中心で青年団や若者グループを含む県内の青年組織の人数や変遷、活動内容、自治体との関係などを詳しく検討している。特に、「合併した新自治体と旧市町村の地域の狭間で様々な事業を消化し、地域の活性化や世代をつなぐ役割を担う多忙な日々を過ごしている青年組織・団体像と青年像が浮かび上がってきた」と指摘しており、市町村合併後の青年団活動の課題が浮き彫りにされている。一方

で、研究はアンケート調査の結果をもとにしたもので、青年団への聞き取りや実態調査は示されておらず、概観的な内容となっている。

また、沖縄県内に343ある伝統的な地域祭礼（エイサー、獅子舞、棒術、舞踊）に関わる青年会を題材に、戦後の地域祭礼と青年団の関わりを日青協の動向も含めて研究した山城千秋氏の研究も重要である<sup>14)</sup>。沖縄における青年会の地域祭礼への関わりという文化活動が、戦前・戦後一貫して地域の共同性と一体化して継承発展し、祭礼を通して「一人前」と認められることで青年の主体性形成に役割を果たしてきたと結論づけている。また、新しい動きとして、青年会が子どもたちに民俗芸能を伝える役割も担うようになり、地域学習にも役割を果たしていることに着目している。また、山城氏は日青協主催の1961年の第10回全国青年大会で郷土芸能の部が正式種目となり1970年代には参加数が40県に達したことや、沖縄県青年団協議会が1964年に始めた「全沖縄青年エイサー大会」、琉球新報社が1966年に始めた「古典芸能コンクール」などの地域文化の再評価の動きに着目しながら、地域における祭礼の実情を鋭く分析している。すなわち、祭礼復興の担い手となることが期待される一方で、すでに集落単位では青年団が消滅しており、市町村の連合青年団が受け皿にならなければならない現状があり、外部の連合青年団が祭礼を担うことによる地域の共同性維持に対する危惧意識が住民に生まれていることを指摘する。文化を伝承する地域基盤と青年団の広域的組織化が青年団と地域の間乖離を生みだしているというのである。

## 2.2 高知県の青年団研究

高知県における1970年代までの県内青年団の動向は『高知県青少年団体史』などに詳しくまとめられている<sup>15)</sup>。江戸時代に若連中・若衆組と呼ばれた組織は明治期には衰退し、学習会や夜学会などを行う青年会が生まれる。大正期には青年団という名称に変わり、県連合青年団が設立され、県内の組織化が進む。各地で青年団が地域祭礼の担い手として組織され、市町村の青年団組織とも連携していた<sup>註3)</sup>。戦時期には県青少年団として戦時体制に組み込まれる。戦後県内各地の集落で新たな青年団の組織化が進み、祭りや奉仕活動などに関わった。市町村や郡単位で青年団組織をまとめる連合青年団も各地で生まれ、1947年には県連合青年団が組織されている。1948年に始まった自動車文庫（図書館バス）の巡回が、青年団活動の広がり結びついて

各地の読書活動や図書館設置へと結びついていったことも明らかにされている<sup>16)</sup>。1967年には県連合青年団が県青年団協議会（県青協）へと組織改編。当時県内には約300団体、約8千人の青年団員がいたという。県内の青年団員が集まる青年大会など現在まで続く事業が始まり、機関誌『青年土佐』（のちに『ぼかぼか土佐』）の発行も行われている。

2007年発行の『高知県青年団協議会四十年史』から1970年代の動向を探ると<sup>17)</sup>、1974年には「ふるさと運動」の一環として県青協が主体となり「第一回土佐の秋祭り」が開催され、県内の郷土芸能の高知市内での一斉披露など文化の再顕彰が行われている（1977年まで）。1970年代には「ふるさと運動」の強化、社会教育施設の設置・整備運動などが県青協の重点目標にあげられている。1980年代になると、選挙啓発パレードや障害者交流などの事業が行われ、平成期に入ると組織強化・拡大が重点目標として上がるようになり、青年団の実態調査なども行われている。また、1994～1997年にはリーダー養成塾（龍馬塾）が実施され、2000年代に入ると市町村青年団とのネットワークづくりが重点目標となり、団員拡大よりも団員の質的向上により青年団の活性化を図ろうとした様子がうかがえる。

個別研究では、青年団の学習活動に着目した吉富啓一郎氏の研究が注目される。1950～60年代に西土佐地域の青年団が行った夜学会や生活記録活動を詳細に検討した研究<sup>18)</sup>や昭和末期・平成初期の青年団の動向をまとめた研究<sup>19)</sup>である。特に、後者の研究では安芸市連合青年団、香北町青年団など複数の青年団の活動をとりあげ、イベント開催などで組織の活性化が図られている点に着目し、県の国民休暇県構想や国のふるさと創成基金など行政施策との関わりを指摘している。また、戦後の四万十市西土佐地域の青年団の芸能活動、昭和期から続くバンド活動を分析し、現代の地域の若者や子どもたちの間に起きたバンドブームの背景を探った研究もある<sup>20)</sup>。ここでは、過去に音楽活動に関わってきた青年団出身者がサポーターとなり、各地に音楽スタジオが整備され、ライブイベントが実施されている実態を紹介。青年団活動を基盤として世代を超えて地域に根付く音楽文化の存在を指摘している。

## 2.3 研究の課題

青年団活動が盛んだった昭和期の青年団については、史料や統計資料の分析、聞き取り調査などを踏まえた研究や報告が数多くあるほか、自治体史等で具体的な活動が紹介されている場合もある。一方、

青年団活動が大きく衰退した平成期については、日本青年団協議会や青年団員による事例報告は多く見られるが<sup>2)</sup>、実証的な研究はほとんど行われていないのが現状である。高知県においても昭和期の青年団活動の整理が中心で、平成初期までしか具体的な活動実態は把握されていない。県青協の資料も少なく、平成のうちに多くの青年団が活動を休止しており、各青年団がどのように組織され、どのような活動を行ったのかは不明な点が多い。まずは、県内各地の青年団に31年の間にどのような組織変遷があり、役割の変化があったのか全体像を検証する必要がある。青年団に関しては、活動に参加した団員や元団員が地域に残っており、今後聞き取りにより詳細を検討していく余地も多いにあると考える。

### 3. 資料と方法

青年団について調べる際、研究・報告の主体は研究者（歴史学・民俗学・社会教育）と実践者（青年団員）に分かれ、研究・報告の方法は青年団の文献資料の分析、聞き取り・アンケート調査、自身の体験の回顧録と大まかに三つに分類できる。筆者は青年団に関しては研究者かつ実践者であるという利点を活かして、三つの方法論を複合的に用いて、断片的にだが平成の青年団の全体像を復元する。

本稿では、まず青年団の時系列的な変化を追うために、青年団の活動を記した文献資料を分析する。県青協には所属会員数などの統計資料が残っておらず、数量的な分析はできない。そこで、地域の青年団の活動が紹介された地元紙『高知新聞』の記事を資料として集成し、記載を分析する歴史学的手法を用いて、イベント的な地域祭礼と伝統的な地域祭礼についてそれぞれ平成期の活動の変遷を追いたい<sup>註4)</sup>。

続いて、青年団内のより細かな地域祭礼との関わりを検証するため、平成24年に中村連合青年団が地元の不破八幡宮と取り組んだ「四万十市祭礼応援プロジェクト」の概要を、企画運営を担った筆者が実践者の目線から詳述する。

さらに、青年団の再結成や再編が相次いだ平成20年代の動向について、活動の中心を担ってきた県青協の役員に聞き取りを行い、詳細を整理する。平成20年代前半の高知県西部における青年グループの動きや、平成20年代後半に青年団組織が先細りする中で役員らが行った改革に着目し、高知県で起こった青年団の質的变化を検証し、組織の変遷や役割の変化を明らかにしたい。

以上のような、文献資料を用いた客観的な分析と

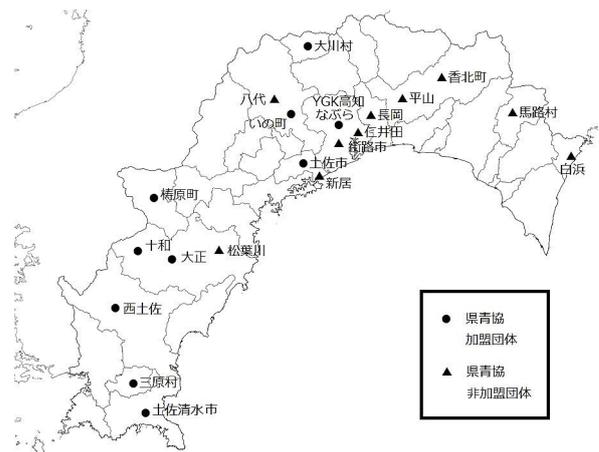


図2. 県内で活動する青年団の分布

青年団内部での体験をもとにした実践活動の分析、聞き取りによる青年団組織の分析という三つの方法論を用いて、平成における青年団と地域祭礼との関わり、地域における役割を明らかにしたい。

### 4. 新聞資料に見る平成の青年団

#### 4.1 県内青年団の推移

まず、県内の青年団の推移を県青協の資料と『高知新聞』の記事から大まかに概観する。昭和40年代に約300団体、約8千人の団員がいた県内の青年団だが、昭和60年ごろに3千人台に減少し、平成元年には33団体、平成18年には13団体約450人まで減少している<sup>註5)</sup>。平成3年の連載「村おこし 真剣勝負 漂流する青年団」（計6回）によると、青年団の名簿上の団員数は東豊永15人、本山町36人、北川村約20人、馬路村25人。実質活動しているのはごく一部で人数が集まらず総会の開催が難しい団もあることが記されている。また、青年団衰退の要因として、活動のマンネリ化、青年団が役場のイベントの下請け化し若者の拒否反応を助長していること、新たな青年団体の出現、大規模イベント成功の重荷などがあげられている<sup>註6)</sup>。平成19年の記事「県内青年団が激減」では、衰退の背景として、平成の青年団の中核を担う役場職員が市町村合併により減少したこと、NPO活動の活発化により行政が住民力として期待する主体が変わったことなどがあげられる<sup>註7)</sup>。その後12年を経た令和2（2020）年現在、県青協に加盟している県内の青年団は11団体、約150人。未加盟だが県青協が把握している10団体を含めると計21団体が活動している（図2）。加盟団体は県西部特に幡多地域に多く、県東部には加盟団体がいない。非加盟団体のうち馬路村や香北町の青年団はかつての加盟団体であ

るから、平成19年から団体数はほとんど減っていないということになる。こうした青年団の現状には平成20年代の動向が大いに影響していることが推測される。

#### 4.2 記事数数の分析

平成元年～平成31年の『高知新聞』記事のうち、「青年団」という用語が記事の文章に記されたものを集成すると1451件に上った<sup>註8)</sup>。昭和60年代の記事数も含めて記事数数の推移をグラフで示したのが図3である。昭和60年に89件あった記事数はその後40件台に落ち込み、再び平成初期になって60～80件台に増えている。平成元年の県内青年団の動向研究は、この時期青年団活動が活性化したことを指摘しており、それに対応した記事数になっている。平成5～7年には100件を超える記事が掲載されているが、その後記事数は大きく落ち込み右肩下がりになり、横ばい状態が続く。前掲の平成19年の「県内青年団が激減」の記事はこうした現状を示したものだだろう。この増減の背景は詳しく検討する必要がある。平成20年代初期には一時年間10件しか記事が掲載されなくなるが、平成20年代前半から記事数が上昇に転じる。この増加も検討の対象である。

#### 4.3 新聞資料に見る青年団活動

##### ーイベント的地域祭礼との関わりからー

記事で紹介された青年団の団体名、活動内容を年別にまとめたのが表1, 2, 3である。また、名称は異なるが青年団とほぼ同じような活動を行う「青年会」の記事を年別にまとめたのが表4である。これらの活動内容と記事数から三つの画期を設定し、変遷を追ってみよう。

まず団体名を見ると連合青年団が多数を占め、地域単位の青年団が非常に少ないことが分かる。しかし、平成元年には松尾（土佐清水）、浦ノ内（須崎）、大谷（室戸）、曙町（高知）などが見られるように、平成初期には一定数地域青年団が残存していたことが分かる。また、青年団は一般的に18～35歳が所属する団体であるが、団体によっては35歳を超える団員もおり、団員減が進む事情もあって年齢規定が明確化されていない組織もあるようである。

##### 【再生期（平成元年～7年）】

平成の初期には、昭和末期に比べ大きく記事数が増え、田野町（平成元年）、物部村青年団（平成2年）の復活や、高知市の連合青年団「ヤングジェネ

レーション高知」、東洋町の東洋町青年団の結成に代表されるような活性化と再生の動きが各地で起きていることが確認できる。活動としては、平成にふさわしい新たなイベントが青年団によって次々と企画された時期である。ロックなどを中心にした音楽イベント「天狗高原サマーフェスティバル」（東津野村）、若者が甘いカクテルを楽しむ「ホワイトカクテルパーティー」（西土佐連合）、自然や観光を意識した海開き（沖の島連合）や謝肉祭（大川村）、「物部川 遊裕共和国」（香北町）、「室戸 海・遊共和国」（室戸市連合）、「陣ヶ森を歩こう家族の集い」（吾北村）などが地域の祭礼（お祭り）として定着していく。また、障害者と健常者が交流合宿を行う「ラポール王国」（ヤングジェネレーション高知）も障害者福祉の新しい取り組みとして始まっている。平成7年に始まり、後に風物詩となっていく四万十川の「こいのぼりの川渡し」や仁淀川の「紙のこいのぼり流し」にも青年団が関わっていたことも注目すべきである。

また、この時期には北川村青年団を中心に中芸5町村の青年団が企画して約7千人を集めた加藤登紀子湖上ダムコンサートや、大正町連合青年団による武田鉄矢コンサートなど、著名人を呼ぶ大規模なイベントが各地で企画された。この時期の青年団活動を「再生」と位置づけた吉富氏は、上記のような新しい事業（イベント開催）を大きく評価しているが<sup>註2)</sup>、その裏で各青年団が団員減による危機的な状況に陥っていたことも忘れてはいけない。地域を見つめなおし、中芸5町村の青年交流の促進を期待していたダムコンサートだったが、中心メンバーは「イベントは成功したが青年団活動は失敗した」と回顧している。コンサート後、毎週のバレーボールの練習が中止となり、集会の参加者も役場職員に限られるようになり、中芸の青年団同士の交流も途絶えたという<sup>註9)</sup>。あまりに大きなイベントをしたため、打ち上げ花火的になり、かえって青年団本来の継続的な活動がばかばかしくなってしまった可能性がある。この間、各青年団がコンサートや劇団公演など大規模なイベントを多数開催するが、平成8年以降はほとんど行われなくなっている。

地域づくりの取り組みが、吾北村青年団の古里の魅力を探るビデオ作成（平成4年）と土佐山青年団の意識調査「未来の土佐山」（平成7年）に限られ、活動がイベントにシフトしている点も注目すべきである。すなわち、団員減に苦しむ青年団が、清掃や慰問などの定期活動や地域イベントの手伝いに負われながらも、新しいイベント開催で地域を活気

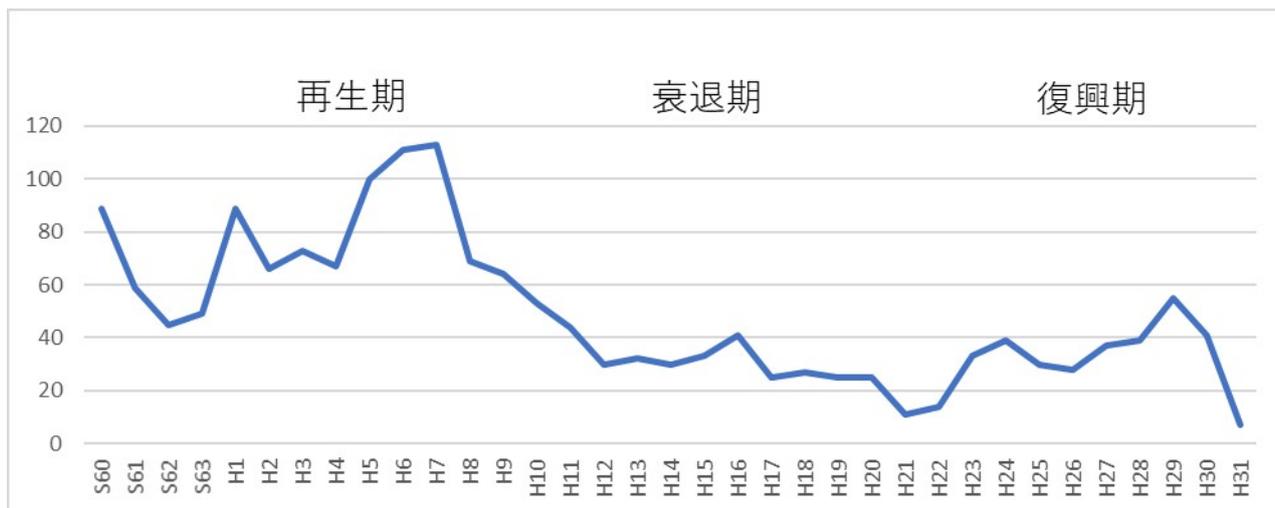


図3. 青年団に関する『高知新聞』記事の年別推移

づけようして再生の道を模索した時期と見たい。

【衰退期（平成8年～22年）】

再生期に見たような団員数減少という難題を克服できないまま青年団は長い衰退期を迎える。記事で紹介される団体数も平成10年ごろから大きく減少し始めており、この頃多くの青年団が活動を休止したことが推測される。平成の大合併による自治体再編も青年団の減少につながっている。青年団だけでは地域の恒例イベントが担えなくなり、イベントの協力団体の一つとなっていく。平成初期に約100人の団員がいた香北町青年団も25人まで減り、看板イベントの「物部川遊・裕共和国」を休止している。その一方で、成人式の催しや福祉施設でのもちつきなど地道な地域活動は継続されており、細々と青年団活動が続いている様子が見える。

一方で、青年会に目を向けると、平成8年には県国際交流課の外国人らが「Genki 青年会」を結成し、中山間地域での演劇公演「土佐弁ミュージカル」や海外留学支援などを始める。青年会は県在住外国人の交流の場となり、地域との国際交流の機会をつくっており、現在まで活動が継続されている。

【復興期（平成23～31年）】

後述する西土佐連合青年団の大崎博士氏による活動が形になり始め、青年団の活動が増え始めた平成23年を画期としたい。この後、青年団による被災地支援（平成23年～）や、中村連合青年団（平成24年）、平山青年団（平成28年）、土佐市青年団（平成30年）の復活、高知市内の四つの街路市の若者が活性化のために組織した街路市青年団（平成28年）、東京を拠点とした県青年団お江戸支部（平成30年）の結成、県の「こうち出合いのきっかけ応援事業」を契機とした各青年団による婚活イベン

トの開催、夜学会の実施など新しい動きが次々と始まる。平成26年には青年団活動が休止していた土佐町で新しい青年組織「土佐町構造会議」が結成、平成27年には活動が停滞していた香北町青年団も「かほく星空劇場」というイベントを始めている。この時期には各青年団の交流が活発化し、新たな担い手として大学生が活動に参画するなど、記事件数は少ないが、地域と結びついた活動が行われるようになることから、この時期を青年団の復興期と位置づけたい。

#### 4.4 伝統的地域祭礼と青年団活動

次に伝統的地域祭礼との関わりで青年団の記事を分析する。平成初期には、神社の祭礼を担う地域単位の青年団が複数確認できたが、衰退期に入ると伊野町の八代青年団（農村歌舞伎）や須崎市の野見青年団（潮ばかり）、高知市の東町（仁井田）青年団（おなばれ・奉納相撲）などしか記事が確認できなくなる。これらの団体には40代の人も参加しており、地域で比較的若い年代が青年団として祭礼を担っている状況が分かる。

複数の記事によると、こうした地域青年団は昭和50年代半ばまでは残存していたが、団員減少で祭りの主体を担えなくなり、消防団や青年団OBらが活動を引き継ぎ、祭礼を維持したことがあるようである。南国市では地区ごとで盆踊り（南国踊り）を踊る「豊年祭り」が、運営を担ってきた市連合青年団の団員減少（最盛期の300人から45人）によって縮小や中止に追い込まれている状況が報告されている。その結果、休止も検討されていた南国市奈路地区では青年団OBらが中心になって消防団、婦人会、PTAなどと実行委員会を結成して祭礼を継

表1. 『高知新聞』の青年団記事の年別集成表①

西暦	平成	記事数	紹介された青年団	団数	活動内容
1989	1年	89	東川(安芸市)、越知、県青協、室戸市連合、安田町、香北町、嶺北青年協、幡多地区青年協、田野町、馬路、宿毛市、夜須町、鏡村、東豊永、北川村、大正町連合、春野町、香美地区青年協議会、魚梁瀬、松尾(土佐清水市)、十和村連合、浦ノ内(須崎市)、赤岡町、仁淀村、弘見(土佐清水市)、東津野、大谷(室戸市)、大川村、窪川町連合、八代(伊野町)、曙町(高知市)、大月町連合、土佐町	34	まちづくり意見交換会、明るい選挙推進協(役員)、成人式写真販売、中園慎太郎の映画づくり、加藤登紀子湖上コンサート、青少年教養講座、あしたの日本を創る協会(奨励賞)、青年団研修会、ふるさとを考える青年のつどい、田野町青年団復活、「物部川 遊裕共和国」、県青年団協議会20周年記念式典、「キョーゾー&ブ」コンサート、東京キッドブラザースミュージカル、中国少年京劇団公演、給食用弁当箱寄贈、梶ヶ森清掃、武田鉄矢コンサート、国民休暇県第1回功績者表彰(あったかリーダーづくり賞)、知事表彰(環境美化功労)、あじさい街道清掃、「室戸 海・遊 今日和国」、田園祭・土佐山田祭り(よさこい踊り)、嶺北青年大会、森林鉄道を走らす会、労働大臣褒賞、花植栽、「四万十川まつり」灯ろう製作、浦ノ内バンバン祭、茶霧湖まつり(盆踊り)、戦没者慰霊盆踊り、天狗高原サマーフェスティバル、安全旗寄贈、謝肉祭、紅葉まつり、全国青年体育大会、八代八幡宮神祭(農村歌舞伎)、もちつき、福祉バトロール、サンタ慰問
1990	2年	66	大豊町連合、安芸市連合、伊野町、香北町、南国市連合、伊尾木(安芸市)、県青協、東豊永、浦ノ内、室戸市連合、物部村、郷(東津野)、東津野村、伊野町連合、宿毛市連合、窪川町連合、北幡地区青年協、東洋町、八代、吾北村、土佐山田町、鏡村、大月町連合、土佐山村、三原村、大正町連合、ヤングジェネレーション高知(高知市)	26	成人式(坂本龍馬影絵劇)、新成人アンケート、青少年国際交流の集い、南国市連合結成30周年式典、ふるさとふれあい祭り、「物部川 遊裕共和国」、親子ふれあいまつり、野菜市場、地域環境美化功績者表彰、「海・遊 今日和国」、青年学級復活、物部川青年団復活(とちのは)、平和集会・史跡巡り、安芸市連合青年団35周年記念大会、郷土美化優良団体、四万十川源流探索、休暇県構想推進功績者、県青年大会、青年のバス、天狗高原サマーフェスティバル、老人ホーム慰問(盆踊り)、北幡青年大会、東洋町青年団結成(青風会)、八代八幡宮神祭(農村歌舞伎)、龍馬賞受賞、もちつき、産業文化祭、クリスマスパーティー、青年センター祭
1991	3年	73	安芸市連合、香北町、土佐清水市連合、香我美町、吾北村、県青協、宿毛市連合、沖の島連合(宿毛市)、南連合(須崎市)、物部村、野市町、伊野町連合、西土佐村連合、八代、中村市連合、大川村、本山町、北川村、土佐山田町、土佐山村、ヤングジェネレーション高知、土佐町、魚梁瀬、馬路	24	成人式(坂本龍馬影絵劇)、香北山里シンボ、土佐清水市スポーツ賞、フォトコンテスト、「物部川 遊裕共和国」、渡米研修、陣ヶ森を歩こう家族の集い、親子まつり、海開き、キャンプ地清掃、カープミラー清掃、模擬議会、自転車レース、フレソノ友好交流青年団、夏じゃけんええがよ四万十、安芸次世代会(よさこい踊り)、八代八幡宮(農村歌舞伎)、休暇県構想推進功労者、青年のバス、機関誌発行、映画上映会、謝肉祭、ゆずの里コンサート、もちつき、優良青年団体賞、富山県青年団との交流、クリスマスパーティー、青年サミット
1992	4年	67	南国市連合、宿毛市連合、西土佐村連合、香我美町、幡多地区青年協、土佐清水市連合、香北町、県青協、土佐山村、沖の島連合、土佐町、嶺北地区青年協、鏡村、十和村、窪川町連合、東川、中村市連合、大正町連合、吾北村、大川村、八代、池川町、大月町連合、馬路、上町(室戸市)、夜須町、赤岡町、田野町	27	成人式(もちつき・コンサート)、ホワイトカクテルパーティー、富山スキーツアー、北海道青年団来訪、佐賀県青年団来訪、ふるさとを考える青年のつどい、青年のバス、「物部川 遊裕共和国」、工石山清掃登山、天狗高原サマーフェスティバル、海開き、花植栽、自然に感謝する祭典、盆踊り大会、四万十川まつり、模擬議会、県青年大会、古里の魅力ビデオ作成、ほのほの王国もみじまつり、謝肉祭、八代八幡宮(農村歌舞伎)、安居溪谷イベント(釣り堀・出店)、欧州留学(青年の翼)、村後継者海外派遣事業(ドイツ)、スキー研修、もちつき、優良青年団体賞、クリスマスパーティー、バレー大会、回番(火の用心)
1993	5年	100	夜須町、赤岡町、南国市連合、土佐清水市連合、県青協、吾北村、土佐山村、戎町(室戸市)、新町(室戸市)、物部村、佐川町、香北町、沖の島連合、東豊永、須崎市、中土佐町、安芸市連合、東津野村、伊尾木(安芸市)、香美連合青協、土佐山田、香北、野市町、香我美町、久保田(安芸市)、大正町連合、十和村、梶原町連合、大川村、日高村、北幡地区青年協、鏡村、八代、西の浜(室戸市)、中村市連合、ヤングジェネレーション高知	36	成人式(もちつき等)、エイズ研究家講演、県青年問題研究会、「農山漁村婦人の日」大会、全国青樹祭、どろめ祭り実行委員会、室戸市羽根町駅伝、生涯学習大会、ボウリング大会、物部川遊・裕共和国、空き缶拾い、海開き、知事懇談会、ニューメディア・セミナー、欧州留学(青年の翼)、門谷南嶺追悼作展(影絵上映)、カヌー教室、「たま」コンサート、天狗高原サマーフェスタ、老人ホーム夕涼み会(波濤太鼓・獅子舞)、ふるさと大正祭り、四万十川祭り、異業種作品展、高知県青年の翼事後研修会、県青年大会、12時間耐久スポーツ大会、謝肉祭、土佐民話まつり、姉妹都市・岩沼市訪問、北幡青年大会、四国カルストもみじまつり、どろんこ祭り、フェスティバル土佐ふるさとまつり、曙町の里まつり、八代八幡宮(農村歌舞伎)、安芸タートルマラソン、岡村十兵衛先生追善相撲大会、もちつき、優良青年団体賞
1994	6年	111	夜須町、赤岡町、吾北村、土佐山村、中村市連合、南国市連合、宿毛市連合、県青協、池川町、西土佐村連合、土佐山田町、大正町連合、大川村、宿毛市連合、香北町、大野見村、ヤングジェネレーション高知、不破「四万十会」(中村市)、土佐山村、沖の島連合、伊野町連合、十和村、大川村、東津野村、梶原町連合、東豊永、土佐清水連合、安田町、志和(窪川町)、八代、三原村、西の浜、安芸市連合	33	成人式(インタビュー・立食パーティー等)、国民体育大会高知県招致委員会、スキー研修会、高齢化社会を考えるつどい、カクテルパーティー、児童養護施設(豆まき)、語りあひみつめ合う集い、四万十川駅伝、音符の雪コンサート、生涯学習振興大会、物部川遊・裕共和国、赤岡海岸清掃、陣ヶ森を歩こう家族の集い、アメゴ釣り祭、中川内市舞体験学習、障害・健全児交流会(宿の場「ラポール王国」、工石山清掃、海開き、児童の権利に関する条約批准を喜ぶシンポジウム、国体高知県準備委、リチャード・デビズ高知公演、日本青年団協議会オリジナルミュージカル「ウェディングベルがききたくて」公演、野外コンサート「Rock To Rock in Tosayama」、伊野町民祭町民祭「日本一大きい福俵」製作、軽音楽コンサート「夏のアルバム-ロマンティック・シティー・イン・スクモ」、四万十川祭り、謝肉祭、天狗高原サマーフェスタ、不破八幡宮みこし洗い、三世代運動会、結いの里体力増強コンサート、棚田オーナー交流、「たま」コンサート、北幡地区青年大会、マウンテンバイク四国大会、国道清掃、県青年の翼OB交流会、神峯神社大祭、ハロウィンイベント、謝肉祭、志和天満宮・諏訪神社神祭(棒打指導)、八代八幡宮(農村歌舞伎)、健康文化祭、山田養護学校高等部収獲祭、岡村十兵衛先生追善相撲大会、四国青年団協議会「四国ブロック女子集い」、県政車座談会、民俗歌舞団「わらび座」公演、出張サンタ、優良青年団体賞、国土庁「山村アカデミー」事業移住体験、河川浄化を促進する協議会、知的障害者施設・養護学校慰問(クリスマス会・もちつき)

表2. 『高知新聞』の青年団記事の年別集成表②

西暦	平成	記事数	紹介された青年団	団数	活動内容
1995	7年	113	香美地区青年団協議会、西土佐村連合、中村市連合、県青協、南国市連合、梶原町連合、土佐山田町、宿毛市連合、野見(須崎市)、大正町連合、香北町、幡多地区青年協、鏡村、土佐山村、大野見村、安芸市連合、十和村、東津野村、沖の島連合、土佐清水市連合、不破「四万十会」、畑山(安芸市)、四国青年団協議会、大川村、北川村、八代、田野町、夜須町、吾北村、ヤングジェネレーション高知	29	成人式(立食パーティー、記念植樹)、寒中水泳、民俗歌舞団・わらび座公演、寅さんを呼ぶ県民の集い、福祉施設慰問(豆まき・パルンタイン)、ホワイトカクテルパーティー、潮ばかり、大正町駅伝大会、物部川遊・裕共和国、青年のつどい、劇団ふるさときゃらぼんミュージカル「男のロマン女のファン」南国公演、桜まつり、障害・健全児交流会場の「ラポール王国」、アメゴ釣り祭、郷土を愛し住みたくなる安芸市づくり、こいのぼりの四万十川渡し、紙のこいのぼり製作、アメゴフェア、海開き、安芸市青年団体連絡協議会、四万十川の土木事業検証ツアー、天の川ダンスパーティー、意識調査「未来の土佐山」、オートキャンプ教室、不破八幡宮みこし洗い、平和の鐘つき、エレクoon&シンセサイザーコンサート、天狗高原サマーフェスタ、大川村夏祭り、自閉症親の会療育キャンプ、ラポール王国、声楽家コンサート、勤労青年国内研修団、北幡青年大会史編纂、十和村産業祭、伊尾木川源流バスツアー、八代八幡宮(農村歌舞伎)、田野町産業文化祭、クリスマスパーティー、福祉施設慰問(もちつき)、文化施設ワークショップ
1996	8年	69	香美地区青年協、夜須町、田野町、中村市連合、須崎市、安芸市連合、西土佐村連合、大正町連合、東津野村、野見、鏡村、吾北村、魚梁瀬、土佐山村、佐賀町、幡多地区青年協、南国市連合、宿毛市連合、土佐清水市連合、大川村、十和村、県青協、東川、八代、大野見	25	成人式(立食パーティー等)、寒中水泳、ワークショップ「田野 夢未来会議」、ホワイトカクテル・パーティー、四万十川駅伝大会、若者定住団地「土佐派の家」設計意見、潮ばかり、桜まつり、陣ヶ森を歩こう家族の集い、物部川遊・裕共和国、魚梁瀬桜祭り、人権モデル地区活動推進協議会、北幡青年大会史発刊、貫之時代祭、音楽コンサート、坂本龍馬倶楽部、あしづり祭り、謝肉祭、大学生防災体験「キャンプ吉野川」、県青年大会、四万十川祭り、天狗高原サマーフェスタ、こまどり温泉まつり、八代八幡宮(農村歌舞伎)、優良青年団体賞、アメゴ釣り祭
1997	9年	64	吾北村、夜須町、大川村、安芸市連合、中村市連合、東津野村、梶原町連合、幡多地区青年協、伊野町、野見、鏡村、口屋内(西土佐村)、魚梁瀬、香北町、土佐清水市連合、日高村、大正町連合、西土佐村連合、奈半利町、北川村、八代、野市町、土佐山村、西土佐村連合、香美地区青年協、土佐山田町、香我美町	27	成人式(立食パーティー等)、四万十川流域住民ネットワーク、幡多地区青年のつどい、民俗歌舞団・わらび座公演、潮ばかり、桜まつり、陣ヶ森を歩こう家族の集い、なかよし運動会、魚梁瀬地区観光開き、物部川遊・裕共和国、謝肉祭、障害・健全児交流会場の「ラポール王国」、桜浜空き缶拾い、坂本龍馬倶楽部、語り合い見つけ合う集い、ふるさと大正まつり、四万十川源流点の森づくり、天狗高原サマーフェスタ、県青年大会、「よさこい高知国体」内定記念フェスティバル、ふれあいサイクリング、女性会議、中岡慎太郎銅像建立実行委員会、八代八幡宮(農村歌舞伎)、インターネット青年団交流、香北町青年団30周年記念式典、四万十教育・文化シンポ、福祉施設慰問(もちつき)
1998	10年	53	大川村、権谷(西土佐村)、安芸市連合、野見、佐川町青年団連絡協議会、北川村、吾北村、西土佐村連合、口屋内、香北町、土佐町、東津野村、日高村、宿毛市連合、魚梁瀬、不破「四万十会」、県青協、宇津野「うつのむら」(高知市)、野市町、八代、春野町、片島(宿毛市)、土佐清水連合	22	成人式(アルバム贈呈、ミニコンサート等)、氏神様で年越しそばふるまい、幡多郡連合青年団記録誌編纂、高知市勤労青年国内研修団、潮ばかり、劇団「ふるさときゃらぼん」ミュージカル、町の清掃車を宣伝カーに、陣ヶ森を歩こう家族の集い、なかよし運動会、物部川遊・裕共和国、森の中の結婚式、、みどりの花嫁推進協議会、追合滝看板設置、日高養護学校七夕祭り、音楽ライブ「マージアランド・ライブ'98-風がくれた休日」、スポーツ交流・料理教室、フェスティバル魚梁瀬、中芸地区泥んこバレーボール大会、たんぼつば広場夏期キャンプ、'98フェスティバル田野(和太鼓演奏)、不破八幡宮みこし洗い、演歌歌手チャリティーコンサート、県青年大会、木炭づくり、障害・健全児交流会場の「ラポール王国」、川上神社神輿かつぎ、八代八幡宮(農村歌舞伎)、福祉施設パレ、人権啓発フェスティバル(獅子舞・盆踊り)、福祉施設慰問(出張サンタ)、ビッグ門松製作
2000	12年	30	安芸市連合、大川村、物部村、土佐山村、馬路村、吾北村、十和村、大正町連合、西土佐村連合、梶原町連合、八代、池川町、土佐清水市連合	13	成人式(スライド上映等)、ミュージカル「噂のファミリー-億円の花婿」上演、土佐山村教育研究大会、陣ヶ森を歩こう家族の集い、北幡青年大会3年ぶり復活、土佐山おもしろ科学体験広場、高吾北五町村「SONIAサミット2000」、韓国・培材大との交流、八代八幡宮(農村歌舞伎)、謝肉祭、香美郡青年フォーラム、独身男女の出会いの場づくり、福祉施設慰問(もちつき)
2001	13年	32	大川村、野見、田野町、宿毛市連合、土佐山村、赤岡町、梶原町連合、魚梁瀬、香美地区青年協、県青協、香我美町、宿毛市連合、八代、土佐清水市連合	14	成人式(村史贈呈)、潮ばかり、山田洋次監督映画「15歳・学校4」上映会、エレクoon&ピアノコンサート、土佐山村・不明金事件で村・村議会議に要望書、どろめ踊り、田野羽根和道会空手道部30周年練成大会、韓国・培材大との交流、フェスティバル魚梁瀬、熊本県鏡町青年団との交流、土佐山おもしろ科学体験広場、チャリティーライブ「高知西南豪雨救済一絆」、八代八幡宮(農村歌舞伎)、土佐山中学校文化祭、福祉施設慰問(もちつき)、梶原町の未来を考える会公開討論会
2002	14年	30	安芸市連合、野見、吾北村、物部村、馬路村、魚梁瀬、香我美町、西土佐村連合、土佐山村、奈半利町、八代、大川村	12	成人式、東山不燃物処理場対策委員会、潮ばかり、陣ヶ森を歩こう家族の集い、土佐之國時代絵巻・第四十四回高知お城まつり(初駆駅伝競走)、馬路村観光開き、馬路村合併勉強会、自主防犯組織「オレンジポリス」発足、西土佐村「市町村合併を考えるシンポジウム」、県青年大会、土佐山おもしろ科学体験広場、シンポジウム「地域のみんなで考えよう-天然資源活用と地域経済の再生」、八代八幡宮(農村歌舞伎)
2003	15年	33	吾北村、土佐山村、田野町、宿毛市連合、馬路村、梶原町連合、大川村、北幡地区青年団連絡協議会、土佐清水市連合、香北町	10	陣ヶ森を歩こう家族の集い、工石山清掃、田野駅屋イベント(ピアガーデン)、バンド「マージアランド」ライブ、関東百貨店催事「高知の村 馬路村の夏祭り」、よさこいチーム「梶原」結成、夏祭り花火大会、謝肉祭、県内初の自立協議会設立(馬路村)、土佐山おもしろ科学体験広場、川上神社大祭(鳥毛投げ)、優秀青年団体賞、北幡青年大会、出張サンタ(民家)、謝肉祭、青年団交流研修旅行
2004	16年	41	馬路村、土佐山村、吾北村、口屋内、大正町連合、田野町、梶原町連合、西土佐村連合、香北町、八代、土佐清水市連合	11	自立協議会、村長との意見交換会、陣ヶ森を歩こう家族の集い、2004なかよし運動会、ふるさと市、もち米栽培・販売、田野駅屋イベント(ピアガーデン)、土佐山村大同窓会、チーム「梶原」よさこい出場、土佐山おもしろ科学体験広場、日中友好慰問中、美良布商店街休憩所、八代八幡宮(農村歌舞伎)、「山師達人選手権」馬路大会、福祉施設慰問(もちつき)、出張サンタ(民家)

表3. 『高知新聞』の青年団記事の年別集成表③

西暦	平成	記事数	紹介された青年団	回数	活動内容
2005	17年	25	土佐清水市連合、宿毛市連合、土佐山、馬路村、鏡、県青協、大川村、田野町	8	出張豆まき、音楽ライブ「マジアイランド・ライブ2005」、県情報生活維新協議会（調べ学習教材のデジタル化）、馬路温泉一日高知支店、選挙ポスター掲示場設置委託、湯けむりピンポン、もち米栽培・販売、青少年フェスティバル、謝肉祭、福祉施設慰問（もちつき）、街路樹電飾設置
2006	18年	27	馬路村、野見、梶原町連合、大正連合、県青協、香北、大川村、宇津野	8	馬路村まるごと体験ツアー（田植え）、潮ばかり、チーム「梶原」よさこい出場、どろんこ運動会、県青年大会（郷土芸能披露）、ごみの不法投棄清掃、謝肉祭
2007	19年	25	安芸市連合、伊野、香北、大正連合、県青協、梶原町連合、大川村、八代、東町（高知市）	9	バトミントン東部大会、JR高架下の壁画描き、前山公園整備、どろんこ運動会、県青年大会、敬老会慰問（もちつき）、弁天座こけら落とし共同公演（農村歌舞伎）、県青年協40周年記念式典、仁井田神社おなばれ、謝肉祭、八代八幡宮（農村歌舞伎）
2008	20年	25	八代、香北町、佐川町、県青協、西土佐連合、土佐清水市連合、八代	7	県民俗芸能ネットワーク協議会、香北町青年団40周年、緑のふるさと協力隊受け入れ、香北さくらカップ大会（ベタンク）、こうち出合いのきつかけ応援事業」公開審査、県青年大会、チーム「梶原」よさこい出場、婚活イベント「で愛・ふれ愛・めぐり愛」、フットサル大会「謝肉祭カップ」、八代八幡宮（農村歌舞伎）、出合いイベント（梶原町）
2009	21年	11	池川、西土佐連合、八代、山路（四万十市）	4	椿山虫送り、星空の郷西土佐天の川まつり、八代八幡宮（農村歌舞伎）、山路のコッキロ
2010	22年	14	大川村、浦（中土佐町）、県青協、西土佐連合、八代、土佐清水市連合	6	成人式（祝賀会）、伝統行事こめしご、母校に本を贈る運動、星空の郷西土佐天の川まつり、八代八幡宮（農村歌舞伎）、謝肉祭、出張サンタ（民家）
2011	23年	33	西土佐連合、室戸市、野見、山北棒踊り保存会（香南市）、十和連合、馬路村、香北町、大川村、梶原町連合、八代、佐川町	11	成人式（車座談義）、吉良川町並み飛脚レース、潮ばかり、山北棒踊り、馬路まるごと森林の市、七夕飾り・四万十天の川まつり、香美市生涯学習推進大会、大川上神社夏祭り、みちのくYOSAKOIまつり初出場、盆踊り、出合いイベント、ピアノデュオ・クトロヴァッツ兄弟コンサート、八代八幡宮（農村歌舞伎）
2012	24年	39	野見、西土佐連合、梶原町連合、中村連合、県青協、土佐清水市連合、八代、三原村、馬路村	9	潮ばかり、婚活イベント「Hey! Hey! 平家伝説2012」、地域づくり交流会 in 幡多、くちやないアートプロジェクト、連合高知西地域協議会メーデー、中村連合青年団復活、「にぎわいポニート ship for ship」よさこい出場、宮城被災地に漁具倉庫建設、兼松林橋頭顕彰、大宮産業土曜夜市、不破八幡宮祭礼応援プロジェクト、青年のバス、西土佐地域じんけんフェスティバル、八代八幡宮（農村歌舞伎）、婚活イベント「三原村出合い交流会 緑 joy・三原村」、馬路まるごと森林の市、出張サンタ（民家）
2013	25年	30	中村連合、土佐清水市連合、矢井賀（中土佐町）、香北町、西土佐連合、大川村、十和連合、八代、北幡地区青年団連絡協議会、黒潮町、上ノ加江（中土佐町）	11	婚活イベント「出合いきっかけパーティー」、青年のバス、シンポジウム「はたのおと2013」、矢井賀地区松尾神社の花取り踊り復活、ベタンク大会「香北さくらカップ大会」、にぎわいポニートよさこい出場、早明浦ダムライブポート、四万十川まつり、ベタンク大会「香美市ナイターリーグ」、八代八幡宮（農村歌舞伎）、青年団弁論大会、休校の笹場小に電飾設置、老人クラブ交流会、土佐の農村歌舞伎合同公演
2014	26年	28	八代、土佐清水市連合、馬路村、県青協、芸西村、西土佐連合、大川村、三原村、東町、梶原町連合	10	新春土佐の農村歌舞伎合同公演、交流バスツアー in 馬路村、県青年大会、県青年にぎわいポニート安芸納涼祭よさこい出場、ウオーターズスポーツイベント「レイク・ドラマ」、ニッポンの田舎あそび運動会、土佐町想造会議、仁井田神社秋祭りおなばれ、八代八幡宮（農村歌舞伎）、ジョン万プロジェクト、謝肉祭、母親向けの魚さばき方教室、世界的ピアノデュオ「クトロヴァッツ」コンサート、老人クラブ交流会「S級情熱交流会」
2015	27年	37	土佐清水市、大川村、野見、大正、香北町、三原村、十和連合、八代、唐岩（安田町）	9	まち・むらづくりフォーラム、潮ばかり、嶺北4町村交流会、大正駅前新拠点改修、アンパンマンミュージアム周辺活性化協議会ワークショップ、かほく星空劇場、早明浦ダムウオーターズスポーツイベント、どろんこ運動会、避難所運営模擬体験ゲーム、大川上神社練り込み、八代八幡宮（農村歌舞伎）、ベタンク大会「香美市ナイターリーグ」、神峯神社大祭おなばれ、アンパンマンミュージアムイルミネーション、出張サンタ（民家）
2016	28年	39	三原村、県青協、大川村、十和連合、平山（香美市）、香北町、街路市（高知市）、馬路村、東川（香美市）、八代、東町	12	あしづり駅伝大会、「東の空へ歌よどげ2016春」・防災イベント、ベタンク大会「美良布地区公民館長杯ナイターリーグ」、高知家の入学式、特殊詐欺防犯寸劇、四万十川まつり、平山青年団復活、かほく星空劇場、街路市青年団結成、香北いきいき合衆国、アメゴ放流、川上神社（練り込み）、八代八幡宮（農村歌舞伎）、仁井田神社奉納相撲、ベタンク大会「香美市ナイターリーグ」、美良布地区集落活動センターワークショップ
2017	29年	55	県青協、西土佐連合、大川村、平山、高知市、香北町、三原村、室戸岬町（室戸市）、東町、十和連合、土佐清水市	11	I I O 番の日守劇、夜学会、地区運動会、高知家庭支援団「Hachikin Baby's 56」、天の川まつり、青年団旗募集、市民講座「おれおれ詐欺に気を付けて～特殊詐欺防犯寸劇～」、高知県青年団50周年・にぎわいポニート from 3・11 < 80 3 > よさこい出場、にぎわい夜学会@窪川、かほく星空劇場、どろんこ運動会、議会意見交換会、三原・総社祭復活、津呂王子宮暴れ御輿、大川上神社練り込み、謝肉祭（石川県田河内村の青年団との交流）、十和地域地区民運動会復活、室戸貫赤支援、設立50周年県青年団協議会記念行事、出張サンタ（民家）、一夜限り居酒屋「おかわバル」
2018	30年	41	大川村、土佐清水市連合、土佐市、県青協、白浜（東洋町）、香北町、東町、八代、西土佐連合、長岡（南国市）、県青協お江戸支部	10	青年団現役・OB交流会、あしづり駅伝（50回）、土佐市青年団復活、高岡高校出前講座、防犯啓発キャンペーン（防犯音頭「高知振り込まないの音頭」）、東洋町マリンフェスタ、大川上神社輪抜け、ポスト平成の地方議会構想PT意見交換会、高知県青年にぎわいポニート from 3・11 よさこい出場、大綱まつり大綱編み込み、最初で最後の楽描き祭、県青年団お江戸支部、かほく星空劇場（終了）、土佐市複合文化施設ワークショップ、仁井田神社おなばれ、謝肉祭、大川上神社練り込み、八代八幡宮（農村歌舞伎）、夜学会・古写真展、かほくサミット
2019	31年	7	県青協、県青協お江戸支部	5	成人式（記念公演）、東京土佐寮存続活動、高知家の卒業式、お江戸入学式

表4. 『高知新聞』の青年会記事集成表

西暦	平成	記事数	地域	活動内容
1989	1年	2	奈半利、天神橋	盆踊り、鳴子踊り、土曜夜市
1990	2年	2	帯屋町筋、小筑紫	歌舞伎回り、泊まり屋建設
1991	3年	1	船戸	音楽会、成人式、土曜夜市、肝試し
1992	4年	8	帯屋町筋、天神橋、奈半利、船戸	成人式、土曜夜市、肝試し、音楽会
1993	5年	11	帯屋町筋、天神橋、船戸、都呂、安田、さつき	よさこい祭り、土曜夜市、あったかサイクリング、まんがランド(教室等)、太刀踊り、結いの里祭り、保育所餅つき、クリスマス施設訪問
1994	6年	12	帯屋町筋、船戸、奈半利、帯屋町1丁目	成人式無料撮影、道路案内板設置、カーブミラー清掃、バレーリーグ
1995	7年	15	帯屋町1丁目、帯屋町筋、安田、奈半利	成人式無料撮影、町生涯学習推進大会、よさこい祭り、バレーリーグ
1996	8年	14	Genki、帯屋町筋、船戸、土佐清水鯉節水産加工業協同組合	土佐弁ミュージカル、浜辺の清掃、「こうちくらぶ」(新高知国際ネットワーク)、街頭募金、地域観光の会合、運動会
1997	9年	12	Genki、土佐清水、船戸、奈半利、帯屋町筋	街頭募金(フィリピン障害者施設支援)、全国鯉節類青年連絡協議会大会、四万十川流域住民ネットワーク、町内駅伝大会、土佐弁ミュージカル、町港まつり
1998	10年	5	Genki、奈半利	土佐弁ミュージカル、中芸地区泥んこバレーボール大会
1999	11年	6	帯屋町筋、Genki、奈半利	大書き初め、成人式無料撮影、土佐弁ミュージカル
2000	12年	4	Genki	土佐弁ミュージカル、留学支援活動
2001	13年	10	Genki、奈半利	土佐弁ミュージカル、留学支援活動、カーブミラー清掃、町立生活体験学校清掃、町港まつり(よさこい踊り)
2002	14年	4	Genki、奈半利	土佐弁ミュージカル、留学支援活動、町港まつり(よさこい踊り)
2003	15年	6	Genki、奈半利	土佐弁ミュージカル、留学支援活動、小学生交流会(昔遊び)、カーブミラー清掃、奈半利駅ペイント
2004	16年	2	Genki	土佐弁ミュージカル
2005	17年	3	Genki、安田町	土佐弁ミュージカル、選挙ポスター掲示場の設置
2006	18年	3	帯屋町筋、Genki、奈半利	土佐弁ミュージカル、ちよびつとJAPAN!映像祭、県青年体育大会
2007	19年	4	帯屋町筋、土佐清水地区、Genki、佐喜浜	成人式無料撮影、全国鯉節類青年連絡協議会大会、土佐弁ミュージカル、こども俄
2008	20年	4	Genki、佐喜浜	土佐弁ミュージカル、こども俄
2009	21年	3	Genki、佐喜浜	土佐弁ミュージカル、住吉神社宵祭、愛宕神社奉納芸能祭奉納芝居
2010	22年	7	Genki、佐喜浜	土佐弁ミュージカル、留学支援活動、佐喜浜の源木を育てる会設立、佐喜浜俄、愛宕神社奉納芸能祭
2011	23年	5	Genki、帯屋町筋、佐喜浜	留学支援活動、成人式無料撮影会、佐喜浜俄、愛宕
2012	24年	4	Genki、佐喜浜、天神橋	土佐弁ミュージカル、佐喜浜俄、連続ドラマ「遅咲きのヒマワリ」ロケ
2013	25年	4	奈半利	町港まつり(よさこい踊り)
2014	26年	6	Genki、奈半利	土佐弁ミュージカル、町港まつり(よさこい踊り・メダル)
2015	27年	4	奈半利	魚梁瀬森林鉄道ART&LIVE(竹明かり)、町港まつり(よさこい踊り・メダル)
2016	28年	6	Genki、奈半利	土佐弁ミュージカル、町港まつり(よさこい踊り・ポスター)
2017	29年	3	Genki、奈半利	土佐弁ミュージカル、集落活動センター「なはりの郷」夏祭り(キャンプ)、室戸貫歩支援
2018	30年	4	Genki、よりすぐりの町、奈半利	土佐弁ミュージカル、集落活動センター「なはりの郷」ツアー「夜の町家ひなまつりwithイケメン」、町港まつり(よさこい踊り・メダル)
2019	31年	3	帯屋町筋、奈半利	町港まつり(よさこい踊り・メダル・ポスター)

続している<sup>註10)</sup>。

戦後、青年団が担ってきた地域祭礼は、昭和期から消防団など新たな担い手へと継承される、もしくは休止・簡素化してしまったが、市町村青年団が存続した地域では平成初期まで持ちこたえていた。しかし、衰退期に入ると団員減がさらに深刻化し、伝統的な祭礼への関わりも薄れていったものと推測される。復興期になって青年団活動が活発化すると、香北町青年団員による大川上神社大祭での練り込み神事への参加や中村連合青年団の不破八幡宮大祭への参加、八代青年団など農村歌舞伎を行う3団体による合同公演など祭礼との関わりが見られるようになる。

また、平成の青年団は、地域祭礼の一つでもあり戦後高知で作られたよさこい鳴子踊りへと接近していく。平成15年には梶原連合青年団が中心となりチーム「梶原」を結成して高知市のよさこい祭りに初出場、以後人気チームに成長していく。平成13年には、奈半利青年会が小中学生を中心としたよさこい鳴子踊りを指導して町港祭りで披露する取り組みを始め、現在まで続いている。西土佐連合青年団と大学生らによる「高知県青年にぎわいポニート」も平成24年からよさこい祭り出場を続けている。

## 5. 中村連合青年団による祭礼支援

平成24年に約20年ぶりに復活した四万十市の中村連合青年団（村上晋平団長）は、農家、栄養士、新聞記者、県職員、市職員の男女8人で構成。結成前の前年（平成23年）から活動を始めていたが、その内容は毎月の定例会、レクリエーションのバレー、陶芸教室・婚活イベントの開催、「みちのくYOSAKOIまつり」への参加などサークル的活動が中心だった。一方で、「地域と結びついた青年団らしい活動をしたい」と考えていた筆者らは、メンバーが住む鴨川地区で古老に地名や民俗に関する聞き取り調査を行い、地域の祭礼維持の厳しい実情を学んだ<sup>註11)</sup>。

こうした祭礼の担い手不足の実情も踏まえ、平成24年10月には「四万十市祭礼応援プロジェクト」（高知新聞厚生文化事業団助成事業）を企画<sup>註12)</sup>。地元の神社・不破八幡宮<sup>註13)</sup>の秋季大祭の支援を行った。プロジェクトでは、子どもたちに祭りに関心を持ってもらい、保護者や地域の大人にも大祭をPRしようと、地元の小学校や保育所、幼稚園に協力を呼び掛け、ポスターを製作した（図4）。園児や小学生に描いてもらった神社や祭りを題材にした

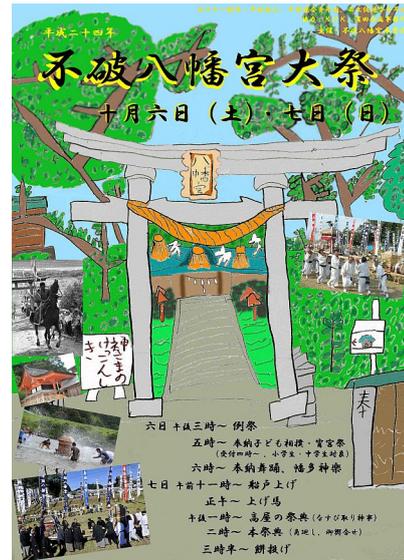


図4. 秋季大祭のポスター



図5. ポスター製作のワークショップ

絵を使って、宮司と宮総代、青年団員によるワークショップでポスターをデザインした（図5）。また、団員は大祭の準備の手伝いや映像による記録なども行い、祭りに関わる中で歴史や神事を学んだ。

準備の過程では、宮総代らが青年団に刺激を受け、のぼりのくい打ちに奮闘する場面もあり、いつになく盛り上がりを見せた。大祭本番も宵祭りの子ども相撲や神様の結婚式などの神事に多くの人が訪れ大盛況、過去10年間で最高の人出を記録した。

成功の要因は、青年団が単独で祭礼を支援するのではなく、神社や住民、小学校、保育所などと連携して地域を巻き込む活動を展開したことにある。学校や保育所は地域学習の一環で協力し、青年団OBである住民が賛同してくれたため、活動が順調に進んだ。若い団員が地域祭礼の現状や課題を学び、祭りを存続していく必要性を認識したことも重要な機会となった。住民でもある団員が自ら記録し、祭りの価値を再認識して掘り起こした地域資源を、

人集めや子どもたちへの祭礼の継承などさまざま観点で地域おこしに活用し、祭礼復興にもつなげたモデルケースとなった<sup>23)</sup>。大祭終了後には、地域活動を紹介するシンポジウムで報告を行い、成果や課題をまとめ、今後の活動へ生かす作業も行った<sup>註14)</sup>。

活動を通して、地域の人たちの心には若い頃の青年団活動が刻まれており、「青年団」という切り口で地域に関わることが重要な意味を持っていることが確認できた。平成の青年団が取り組んできた大多数が訪れるイベントでなく、地域の住民とともに作る地域祭礼が、普段は交流することの少ない地域と若者、子どもたちの世代をこえた結びつきをつくり、文化や記憶の伝承につながることを実感した。

平成21年には、室戸市佐喜浜に佐喜浜青年会が復活し、佐喜浜八幡宮の秋の大祭で奉納される江戸時代以来の風刺劇「佐喜浜俄（にわか）」（国・県無形民俗文化財）の活性化に着手。佐喜浜小学校・中学校の児童・生徒が演じる「こども俄」を始めるなど、次世代への継承に力を入れている。県内の伝統的地域祭礼と青年との関わりは、こうした世代間の橋渡し役として重要な意義を持っていると考える。

## 6. 県青協役員に聞く青年団の復興期

ここでは、高知県の青年団の復興期となった平成20年代以降の動向を、県青協の大崎博士前会長（昭和51年生）と森岡千晴会長（平成3年生）への聞き取りからより詳細に明らかにしたい。それぞれが地域の青年団活動に関わってきた経験も含めて2人の青年団活動史を叙述する。

### 6.1 大崎氏の青年団活動

#### 【西土佐連合青年団】

高知市出身で北海道大学在学中から約10年間、「YOSAKOIソーラン祭り」に関わった大崎氏は、四万十市西土佐地域（旧西土佐村）で仕事をしていた平成19年、西土佐連合青年団が発行していた通信『やぎさんとひつじさん』を見て青年団活動に興味を持ち、村内にあった青年の家「オレンジハウス」を訪れた。青年団は実質的に活動している団員が村役場職員ら数人しかおらず、例年行ってきた成人式の企画運営とカーブミラー清掃、人権フェスティバルでの愛の餅つきなどを続ける停滞気味の組織だった。組織の改革を訴えた大崎氏は平成20年に副団長に就任する。村内で働く若者を誘い、団員らと意見を交わしながら新たな活動を始めていく。青年団組織が消滅していた四万十市中村地域（旧中

村市）の青年活動にも積極的に参加し、中村青年会議所などの青年組織、かつて幡多郡連合青年団という広域組織があった県西部の幡多地域（大月町、土佐清水市、宿毛市、三原村、四万十市、黒潮町）の青年組織とも交流していく。

#### 【幡多地域の青年グループによる地域活性化】

幡多地域では当時、Uターン者らを中心にして新しい青年グループが次々と誕生し、新たな地域イベントを企画していく青年活動の高揚期にあった<sup>註15)</sup>。四万十市中村地域ではUターンして農業をする傍ら西土佐連合青年団の活動に関わっていた西尾祐佐氏らを中心に、中村連合青年団が平成24年に再結成される。黒潮町でも新町長の選挙を応援していた青年らが「黒潮若手の会」を結成し、イベントでの出店や特産品開発（カツオギョーザ）などを進めていく。中村地域では、Uターンして中村青年会議所のメンバーとなった男性が「よさこい四万十プロジェクト」を結成し、中心街でのよさこいイベント「よさこい四万十」を平成23年に初開催する<sup>註16)</sup>。別のUターンした元DJの男性も幡多地域の食やアート、音楽などをテーマにした「はたフェス」を平成23年に初開催する<sup>註17)</sup>。これに刺激を受けた中村青年会議所のメンバーらは平成24年、東日本震災復興支援イベントとして歌手の中西圭三、JAMOSAらを招いたチャリティーライブ「SOMETHING NEW2012」を成功させている。また、元レーサーでUターンして福祉施設を運営していた男性が、平成22年に有志でNPO法人「あらたドリームプロジェクト」を結成。地元アイドルの育成や綱渡りのニュースポーツ「スラックライン」のスポーツイベント、スポーツ選手の講演会などを平成23～27年にかけて次々と開催した。

このような青年グループの活動を背景にして、中村連合青年団の西尾氏と大崎氏が平成24年に幡多情熱交流会を企画。土佐清水連合青年団や三原村青年団、宿毛連合青年団も参加した青年グループの交流会として、幡多地域各地で定期的で開催されるようになった。各団体は幡多地域のイベントへの相互出店や支援など活動面でも連携を深め、幡多広域での人のつながりの促進に役割を果たし、平成25年に幡多5市町村で開催された観光キャンペーン「楽しまん！はた博」の振興にも一役買った<sup>註18)</sup>。

#### 【よさこいと東北支援】

大崎氏は平成23年から西土佐連合青年団の新しい活動として、宮城県仙台市で開かれる「みちのくYOSAKOIまつり」への参加に取り組んだ<sup>註19)</sup>。チームには、団員のほか青年団活動を通してつな

がった大川村や土佐清水市の青年団員、西土佐地域の住民も参加し、宮城県の青年団とも交流を行った。また、大崎氏らは津波で大きな被害を受けた名取市閑上地区を視察して、漁業者や職員に話を聞き、漁具倉庫の復旧が進んでいない現状を知る。そこで平成24年からチームの一員として参加していた高知大生・宮崎哲太氏を中心となり、高知県産材を使った漁具倉庫を県内の工務店や建築士らと連携して宮城県に届けるプロジェクトを始めた。

【大学生の青年団運動への参画】

高知大生の宮崎氏と大崎氏の出会いは平成23年のよさこい祭り本番。大崎氏は「若い人とつながる機会を」と、高知市のよさこい祭りの高知駅前会場で焼きそばの販売を計画しアルバイトを募集、応募してきた大学生の一人が宮崎氏だったという。宮崎氏は大崎氏の東北支援に共感し、平成23年に「みちのくYOSAKOIまつり」に参加する。平成24年には、宮崎氏の友人の高知大生や高知県立大の女子学生ら20人が集まり、青年団員ら20人を加えてよさこいチーム「高知県青年にぎわいポニート」を結成し、高知市のよさこい本祭りに初出場し、再び「みちのくYOSAKOIまつり」にも参加している<sup>註20</sup>。このよさこいの活動をきっかけに、県内の大学生が青年団活動に参画する新しい流れが生まれる。

平成25年以降、大崎氏は四万十市西土佐地域から高知市に拠点を移し、県青協の活動にも参画し、若者の社会教育の実践を意識して大学生を中心にしたさまざまな取り組みを始める。平成26年には、「高知県青年にぎわいポニート」と安芸市子供会連合会チーム「こじゃんとやったろう」が合同チームを結成して安芸市の納涼祭に出場。これは教師を目指す高知大教育学部の学生と児童の交流の機会が、社会教育の場になると考えた取り組みだったという。平成27年には東日本大震災の被災地に思いをはせる集会「東の空へ歌よとどけ2016春」を県内の復興支援団体とともに開催し、被災地の映像上映やダンスなどを行っている。同年には、県内19町村で交通安全指導などの地域見守り活動を続けるボランティア団体「みのり会」に県青協のメンバーが「みのり会青年部」として参加。以後、高知県警と連携した防犯啓発キャンペーン、特殊詐欺防犯寸劇の披露などの地域での活動を展開している。平成28年には、県青協が四万十町などで婦人会と地域活性化などを議論する「夜学会」を開催、青年団と地域住民のつながりづくりを始めた。平成29年には、高知大学時代に大崎氏と青年団活動に関わり、卒業後東京でタレント活動をしている山下耀子氏

が中心となり、口コミなどで知り合った高知に縁のある会社員や大学生ら約40人で「県青年団協議会お江戸支部」を結成、夜学会や寮生不足に悩む東京土佐寮の活性化などの活動を始めている。

大学生が主体の青年団も発足する。平成28年には高知大生を中心に青年団「なぶら」が結成され、平成30年から本格的に活動を始めた。「高知県青年にぎわいポニート」としての夏のよさこい祭り出場、地域での避難所運営ゲームや東北で学んだことの報告会など防災の活動に力を入れている。平成30年には、青年団活動に関わる高知大OBの受け皿として高知市内の社会人による青年団「ヤングジェネレーション高知」を復活させた。婚活イベントやフットサルなどの活動を行い、交流をメインにした青年団として活動を始めている。

以上見てみたように、大崎氏は社会教育の実践や地域のつながりを強く意識し、「人をつなぎ、自由と責任を学ぶ」場として青年団をとらえ、活動を展開している。若い女性がリーダーとなって様々な活動をしている点も重要である。そして、青年団活動に情熱を掛ける大崎氏の後継者が育ってきていることも、青年団の復興期を後押ししたと考えたい。

## 6.2 森岡氏の青年団活動

【歌手を目指して】

次に大崎氏の後継者として次代の青年団を担うであろう県青協会長・土佐市青年団長、森岡氏の青年団活動を紹介する。土佐市出身のシンガーソングライター、森岡氏は平成26年、高知大学を卒業した年に青年団に関わり始める。当時の森岡氏は青年団の中核ではなく、たまに活動に参加する程度だったという。高校時代にバンドを結成し、大学でも軽音部で活動するなど歌手になるという夢を持ち、県青協の交流イベントやよさこい祭りに参加した「県青年にぎわいポニート」で歌を歌う機会に恵まれ、活動に深く関わっていくようになる。

平成26年に県青協の交通安全・防犯活動の中でボランティア団体「みのり会」の10周年記念ソングとして「安全・安心のまち～笑顔の輪」を作詞・作曲。大学卒業後の平成28年には、県内の青年団を応援する県青協内のグループ「Hachikin Baby's56」を高知大生4人と結成し、テーマ曲「Baby lion」を地域で披露している。また、平成30年にはジョン万次郎の子孫、中浜京さんが作詞した曲を中心としたCDアルバムで、メイン曲の「ジョン万が見た海へ」を歌うなど、青年団活動を通して大学卒業後も歌手としての活動を実現させている。

## 【土佐市青年団の復活】

森岡氏は平成28、29年に県青協の常任理事を務め、平成30年に会長に就任する。土佐市在住の森岡氏が県青協の活動とともに進めたのが、土佐市青年団の復活だ。平成30年1月から同じ土佐市出身の高知大生とともに準備を始め、4月に市職員や農家、会社員らと青年団を結成。土佐署の若手警察官30人を青年団員に入団させ、社会福祉協議会の職員にも関わってもらうなど、大規模な勧誘活動を続け、復活3カ月で県内最大の団員数を誇る青年団となり、コンサートやスポーツ活動、夜学会などさまざまな活動を展開している。また、伝統的な地域祭礼に関わる活動も始める。高岡高校の1年生を対象とした出前授業では、夏の伝統的祭礼「大綱まつり」の歴史や運営を学ぶ取り組みを行う。準備の大綱を編み込む作業に高校生や団員で参加するなど、地域との関わりを強めている。

森岡氏は大学時代の青年団員としての体験を糧に、地元で新しい仲間をつくって青年団活動を展開しており、活動を通してリーダーとして成長したことがうかがえる。

## 7. 考察—平成の青年団の特徴と役割

本稿では、高知県における平成の青年団の実態を、新聞記事の分析、地域の青年団の実践例、関係者への聞き取り調査から検証してきた。ここでは検証の結果をまとめ、平成の青年団の特徴と役割について考察する。

まず、新聞記事の分析から平成の青年団の変遷を追い、新しいイベント企画により青年団の再生が模索された「再生期」（平成元年～7年）、団員数減少という難題を克服できず多くの青年団が活動を休止した「衰退期」（平成8年～22年）、大崎氏の登場によって青年団の活性化が行われた「復興期」（平成23年～31年）という画期を設定した。青年団の主体は、市町村単位の連合青年団が中心となり、平成初期にはすでに地域単位の青年団の多くが消滅していた。その中で、連合青年団の活動がイベント的な地域祭礼の担い手として固定化し、ついにはその役割を担えなくなり衰退していったことを明らかにした。その過程では、行政職員主体の組織となったことで、市町村合併のあおりを受けた青年団があったことも分かった。また、一方で成人式の運営や福祉施設の慰問など地域での地道な活動を続け、休止することなく継続した連合青年団もあった。

伝統的地域祭礼と青年団の関わりについては、集落単位の青年団が地域祭礼の担い手となっている地

域がほとんどなくなった一方で、小さな青年団の組織が残り粘り強く地域祭礼を担っている地域があることも分かった。また、四万十市での実践例を通して「青年団」という切り口が地域祭礼には重要で、祭礼の維持だけでなく次世代への継承や世代間の橋渡しに役割を果たすべきであることが確認できた。

また、平成20年代の復興期には、青年団の歴史を知り尽くす大崎氏らによって、夜学や婚活、防災、防犯、祭礼など従来の青年団が担っていた地域での役割をリニューアルさせた活動が数多く行われた。大学生という新しい主体が担い手に加わり、世代をこえて地域とつながる活動が展開されたことは大きな意義がある。Uターン者やIターン者が活動の活性化に果たした役割も大きい。高知県における平成の青年団は長い衰退期を経ながらも、従来の地域での役割を見直し、復興している過程にあるのではないか。その背景には、昭和期に地域づくりを担ったリーダー達の高齢化や人口流出による地域力の衰退など課題先進県と言われる高知県の現状があり、こうした現状を乗り越えようとする若者達の危機感が新しい活動につながったと考えたい。青年団以外の青年グループが数多く登場するなど形は変わっているが、地域との長いつながりにおいて平成期にも青年団は一定の役割を果たしたと考えたい。

一方で、平成期には浮沈を繰り返した青年団の課題として、マンネリ化と継続性が浮かび上がってくる。事実、筆者が携わった中村連合青年団も、筆者と県職員の団長の転勤により平成26年には休止状態になり、活動を再開できていない。大崎氏や森岡氏の活発な活動によって復興期にある青年団が、令和の時代にも勢いを継続できるかは大きな課題である。

新聞記事を見ると、地域において青年団出身者の議員や町長が多く誕生したことが確認できるが、平成期に青年団活動を経験した若手議員はまだほとんどいない。イベントの企画・運営などを通して成長した人たちも多く、青年団が持つ人材育成やリーダー養成の役割は平成の時代にも一定発揮された。青年団が新しい人材を加えながら新たなリーダーを育成し、活動を継続して若者に魅力ある組織であるためには、その社会教育の仕組みの見直しが必要とされているのかもしれない。

## 註

註1) 『高知新聞』平成24年5月18日朝刊。“日本青年団新聞”，97-10, 2012.

註2) 大坂祐二，“青年団における地域活動の展開過

程”,北海道大学教育学部紀要,62,1994の学史整理を参考にした。

註3) 戦前の土佐清水の漁村における青年団活動を自身の体験からまとめた岡林正十郎氏は地域とつながる組織の実態を紹介している(岡林正十郎,“戦前・戦中における一漁村の青年団活動”,土佐史談,243号,2010)。上灘村青年団以布利支部は小学校卒業後の25歳以下の若者が所属する組織で、大敷網漁に従事する若者が多くをしめた。歌舞伎などの演劇会開催、年末の回番(火の用心)、村青年団大会への参加のほか、夏の盆踊りの運営(踊りは女子青年団)、講への役員の参加、秋の神祭の運営(準備・神輿の担ぎ手)などが主な活動であった。青年団は年齢別に丙組、乙組、甲組に分かれ、神祭の準備も「ぐるめき方」「竿方」など準備の役回りを経るごとに別の役ができるようになる年齢階梯組織であった。

註4) 『高知新聞』が平成の青年団史を分析する文献資料として有用である理由として、まず県内に12の支社総局を持ち重要な地域ニュースをこまめに記事にしている点が挙げられる。記事は青年団の全ての活動を網羅しているわけではないが、記者は地域で重要な活動や目立った活動、新しい活動を選んで取材し、青年団の衰退が地域に及ぼす影響など社会の変化も敏感に感じている。そのため、記事を時系列的・総合的に見ていくと、青年団の活性化や衰退などの変化の局面が捉えやすいと考えるからである。また、支社総局に勤務する記者が主に青年団と同世代の20~30代の若者である点も、青年団活動が記事化される要因になっていると考える。

註5) 『高知新聞』平成3年11月6日朝刊、平成19年9月1日朝刊。

註6) 『高知新聞』平成3年11月6日、7日、13日、14日、21日、22日、23日朝刊。

註7) 『高知新聞』平成19年9月1日朝刊。

註8) 地域記事のほか投書、寄稿、広告、告知等に「青年団」の用語が含まれるものも集成した。県外や海外の青年団に言及したものは除外している。記事が取材当時の青年団でない、過去の青年団について記した場合や青年団長などの経歴を記したのも件数に含めている。これは平成に大きく衰退した「青年団」という言葉が記事に記される「話題性」を考慮したためである。

註9) 『高知新聞』平成3年11月21日朝刊。

註10) 『高知新聞』平成2年6月24日朝刊、平成2年7月14日朝刊。

註11) 平成17年の四万十市教育委員会の調査によると、市内にある323件の祭り・行事のうち約3割の91件が「存続が危うい」「中断中」となっており、存続の課題として「後継者の育成」(47%)、「財源の確保」(33%)があげられている。

註12) 平成24年度は他にも、成人式でのボランティア、婚活イベント、はたフェスへの出店、高野弘フォトコンサート「水辺の風景“再発見”」などを行っている。

註13) 不破八幡宮は15世紀に一条氏が京都から勧請し、幡多郡の総鎮守として県西部の信仰を集めた。大祭は近年地域外のイベントと重なり出店や参拝客が激減。運営を担う宮総代の高齢化も進んでいる。秋季大祭では、男みこしと女みこしをぶつける「神様の結婚式」の神事がよく知られており、平成10年頃までは神輿を四万十川で洗う「みこし洗い」を地域青年団「不破の会」が担っていた。

註14) 楠瀬慶太・村上晋平,“地域祭礼の復興と青年団活動の現代的意義—不破八幡宮大祭の事例から—”,シンポジウムはたのおと2013,2013.

註15) 青年グループの台頭の理由として、複数の関係者は高齢化の進行と新しい発想をあげている。幡多地域では、昭和期に青年団や青年会議所などで活躍下60代以上の人たちが高齢化し、地域を引っ張ってきた中堅層も活動がマンネリ化している現状があり、地域を何とかしなければという危機感があった。そこに、地域外でさまざまなことを学んだUターンの若者が新しい企画を持ち込んだ。これを地域の年長者が排除するのではなく、許容して応援したことが活動の進展につながったという。

註16) 当時よさこい祭りは県内中東部を中心に行われ、幡多地域にはよさこいを踊る文化がなく、四万十市民祭というイベントで各団体が披露する中村踊りが地域の踊りとして普及していた。プロジェクトを企画した男性は高知市のよさこいチームのメンバーで、Uターン後、四万十市でチームを結成して高知市のよさこい祭りに出場も検討していたが、関心が低く実現していなかった。「よさこい四万十」も当初、「幡多地域にはよさこいはなじまない」と懸念されたが、高知市のよさこい祭りに出場する複数

のチームが中心街で踊り、イベントは好評を得て、その後も毎年1回継続して行われている。

註17) 「はたフェス」はその後、幡多地域持ち回りのイベントとなり、平成28年まで計6回開催され、毎回1万人近い人が訪れるイベントとなり、幡多5市町村の行政も地域おこしイベントとして運営に携わった。事務局を担った若者らはNPO法人「FUCCO(フッコ)」を作り、県地場産大賞なども受賞している。

註18) 青年グループによるイベントなどの活動は一時的で5年ほどで収束化する。「外から人が訪れるイベントによる一時的な盛り上がり(活性化)はあったものの、地域に還元するという発想が足りなかった」という関係者の指摘もある。

註19) 「よさこいを通じて被災地を元気に」という活動は、大崎氏が大学時代からよさこいとつながりが深かったことに背景があり、昭和21年の南海大地震で甚大な被害を受けた幡多地域の復興支援を行った幡多郡連合青年団の初代団長・兼松林五郎氏の活動に影響を受けていると考えられる。

註20) 「みちのくYOSAKOIまつり」には平成30年まで毎年参加、高知市のよさこい祭りには毎年出場している。

## 文献

- 1) 桜井徳太郎, “講集団成立過程の研究”, 吉川弘文館, 1962. 佐藤守, “近代日本青年集団史研究序説”, 御茶の水書房, 1970. 福田アジオ, “性と年齢の秩序”, 日本民俗学概論, 1983.
- 2) 北河賢三, “戦後の出奔—文化運動・青年団・戦争未亡人”, 青木書店, 2000. 多仁照廣, “青年の世紀”, 同成社, 2003. 高木重治, “高度経済期の農村青年団における学習活動の展開”, 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 別冊16号2巻, 2009. 高木重治, “戦後地域青年団の活動にみる青年団機能の変化”, 早稲田大学教育・総合科学学術院(人文科学・社会科学編), 65号, 2009.
- 3) 関口知誠, “戦後青年団の解体過程に関する一考察—徳島県牟岐町西浦地区の青年団を事例として”, 信濃, 67号1巻, 2015.
- 4) 関口知誠, “民俗芸能の復興における戦後青年団の影響に関する一考察—群馬県川場村春駒を事例に”, 東アジア人類学研究会第四回研究大会報告, 2017.
- 5) 那須野隆一, “青年団論”, 日本青年団協議会, 1976.
- 6) 笹川孝一, “青年の学習活動の基点をどこに求めるか”, 月刊社会教育, 1980年6月号, 1980. 笹川孝一, “青年団活動における地域づくり活動の展開”, 地域にねがす青年たち, 日本青年団研究所報第3集, 1983.
- 7) 元木洋, “青年の地域活動とその活絡”, 青年の選択と現代, 大月書店, 1982.
- 8) 那須野隆一, “青年団調査活動のてびき”, 日本青年団協議会, 1989. 日本青年団協議会, “青年団強化の手引き”, 1978. 日本青年団協議会, “まちが好き! そんなあなたがクリエイター”, 1992.
- 9) 日本青年団協議会, “日本青年団協議会二十年史”, 日本青年館, 1971. 小松光一, “私の青年団改造論”, 日本青年団協議会, 1983. 日本青年団協議会, “組織強化にとりくむ仲間たち”, 青年団研究所報第6集, 1986. 日本青年団協議会, “青年団前進の手がかりを求めて”, 青年団研究所報, 第7集, 1987. 日本青年団協議会, “80年代の青年団運動”, 1991.
- 10) 堺賢治, “公民館分館のスポーツ活動に関する研究”, 愛媛大学教育学部紀要, 第1部第35巻, 1989. 堺賢治, “農村における青年のスポーツ活動とコミュニティ活動に関する研究”, 愛媛大学教育学部紀要教育科学, 38号1巻, 1991.
- 11) 安藤耕己, “若者の「たまり場」づくりにみる地域集会施設のあり方”, 日本公民館学会年報, 1号, 2004. 安藤耕己, “戦後社会教育における「たまり場」論に関する考察”, 吉備国際大学社会学部研究紀要, 16号, 2006.
- 12) 梶井一暁・木内陽一・片山純州, “村落における青年団の活動とその人間形成”, 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 21号, 2006.
- 13) 池水聖子・農中至, “鹿児島県の青年組織にみる社会教育の現状”, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 26号, 2017.
- 14) 山城千秋, “戦後青年団における文化活動の今日的再評価—沖縄の共同体と青年集団を事例に”, 飛梅論集, 2号, 2002.
- 15) 高知県青少年団体史編集委員会, “高知県青少年団体史”, 1979. 北幡青年大会史編纂委員会, “北幡青年大会史”, 1996. 幡多郡連合青年団活動の記録編纂委員会, “青春の軌跡”, 1998.
- 16) 石川敏史, “高知県立図書館における自動車文庫の成立”, 図書館界, 70号5巻, 2019.
- 17) 高知県青年団協議会編, “高知県青年団協議会四十年史”, 2007.
- 18) 吉富啓一郎, “青年問題の研究”, 南の風社, 1990.

- 19) 吉富啓一郎, “地域青年運動の再生—高知県の事例”, 高知大学教育学部研究報告, 40号, 1990.
- 20) 楠瀬慶太, “山里のバンドブームに見る地域活性化の可能性—高知県旧西土佐村の事例から”, 地域活性研究, 4号, 2016.
- 21) 日本青年団協議会編, “地域青年運動 50 年史”, 2001.
- 22) 前掲 19)
- 23) 楠瀬慶太, “地域再生の歴史学—地方紙記者からの提言”, 地方史活動の再構築, 雄山閣, 2013.

# **A Study of Youth Association and Local Festivals in the Heisei Period, History and Practice Activities in Kochi Prefecture**

**Keita Kusunose\***

(Received: May 7th, 2020)

Research Organization for Regional Alliances of Systems,  
Kochi University of Technology,  
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

\* E-mail: kusukei31@yahoo.co.jp

**Abstract:** In this paper, the actual situation of the youth association in Kochi Prefecture in the Heisei period was verified by analyzing local newspaper articles and conducting interviews with the relevant people. First, we set the milestones for the youth association activities, namely the “regeneration period” (1989–1995), “decline period” (1996–2010), and “reconstruction period” (2011–2019). The youth association has declined due to the decrease in the number of youths, as their role has become fixed as leaders of event-type local festivals. However, the youth association during the reconstruction period was engaged in activities that renewed their traditional roles in night schools, parties held to find a marriage partner, disaster prevention, crime prevention, and festivals. University students have joined the youth association as the new bearers of the torch, and activities have been developed to connect them with the community across the generations. In the Heisei period, the youth association in Kochi Prefecture played a specific role in long-term connections with the community.